

韓国

マイナス成長に陥るも、
回復基調は持続

SMBC Asia Monthly

日本総合研究所 調査部

研究員 松田 健太郎

E-mail : matsuda.kentaro@jri.co.jp

■2017年10～12月期は景気が一時的に失速

2017年10～12月期の実質GDP成長率は、前期比(以下同じ)▲0.2%と、7～9月期(+1.5%)から失速し、2008年10～12月期以来のマイナス成長となった(右上図)。

需要項目別の寄与度をみると、輸出が▲2.3%ポイントと大幅に減少した。もっとも、これは、①中秋節(10月の連休)により9月に輸出が前倒しされたこと、②THAAD問題による中国人観光客の減少でサービス輸出が減少したこと、といった特殊要因が背景にあるため、過度に悲観する必要はない。

実際、足元の動きをみると、これまでの輸出主導による景気回復基調は継続していることが確認できる。

1月の輸出(米ドル建て)は、前年同月比+22.2%と大幅に加速した。品目別では、通信機器や液晶パネルが前年を下回ったものの、落ち込んでいた自動車が+13.3%と持ち直したほか、半導体が+53.4%と好調を維持している。地域別でみると、中国向けや欧米向けを中心に増加基調が続いている。世界的な景気回復が続くなか、輸出は当面底堅い推移が続くと予想される。

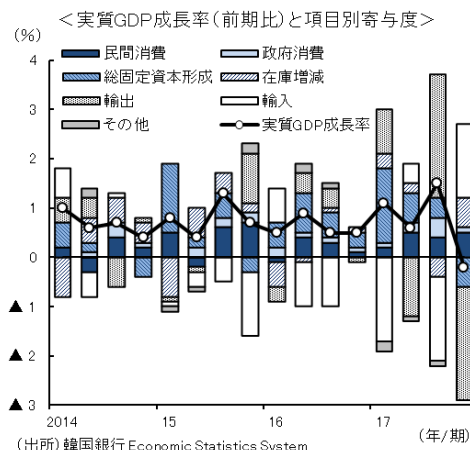
一方、10～12月期の民間消費の寄与度は+0.5%ポイントと底堅い回復が続いている。足元の動きをみても、民間消費を左右する消費者マインドに大きな悪化はみられていない。消費者信頼感指数は、2017年4月に良し悪しの判断の分かれ目となる100を超えて以降、堅調に推移している。2018年1月には109.9と前月から小幅低下したものの、依然高水準を保っている。

なお、2017年通年の実質GDP成長率は前年比+3.1%と、3年ぶりに+3%台を回復した。民間消費が+2.6%と堅調だったほか、半導体関連での設備投資の加速を受けて総固定資本形成が+8.6%と大幅に増加した。2018年は輸出の伸びが縮小するとみられるものの、内外需とも底堅く推移し、+2%台後半の成長となる見通しである。

■物価は中銀目標を下回る水準

韓国銀行は、2017年11月に政策金利を0.25%ポイント引き上げて以降、1.5%の水準で据え置いている(右下図)。今後の利上げに関して、李柱烈総裁は11月の利上げの影響を見極めるといふ慎重な姿勢を示している。足元で消費者物価指数は+1%台前半と、韓国銀行のインフレ目標を下回っているため、利上げを行うとしても、ペースは緩やかなものとなる見込みである。

米国の利上げにより韓国からの資金流出が懸念される一方、追加利上げをすると住宅市場の冷え込みや家計債務の利払い負担の増加により景気回復が腰折れするというリスクもあるため、中銀は双方のリスクバランスに配慮した金融政策の舵取りが求められる。



当レポートに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます。当レポートは単に情報提供を目的に作成されており、その正確性を当行及び情報提供元が保証するものではなく、また掲載された内容は経済情勢等の変化により変更される事があります。掲載情報は利用者の責任と判断でご利用頂き、また個別の案件につきましては法律・会計・税務等の各方面の専門家にご相談下さるようお願い致します。万一、利用者が当情報の利用に関して損害を被った場合、当行及び情報提供元はその原因の如何を問わず賠償の責を負いません。